

気象業務百五十周年記念式典 衆議院議長 祝辞

本日、天皇陛下の御臨席を仰ぎ、気象業務百五十周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

我が国の気象業務は、明治八年に東京気象台で業務を開始して以来、百五十周年という節目の年を迎えました。毎日なにげなく見ている天気予報から、災害時の警報や注意報まで、気象業務は非常に多岐に渡り、そのどれもが私達の暮らしと密接にかかわっています。国民の生活や命を守るため、昼夜を問わず職務に励んでおられる関係者の皆様方に対し、深く敬意を表します。

日本は世界有数の災害発生国であり、古くから地震、津波、火山噴火、台風などの様々な災害に見舞われてきました。特に、近年では、気候変動の影響が顕著になっています。昨年、全国各地で局所的豪雨が発生しましたが、島根県松江市では、わずか半日で降水量が二百ミリメートルを超え、例年の一か月分の雨が降る事態となりました。また、気温も年々上昇しており、観測史上最高の四十一・一度が、この十年間において二度にわたり、静岡県浜松市と埼玉県熊谷市で観測されました。こうした変化に的確に対応するため、そして、災害に強い社会を実現するためには、スーパーコンピュータの導入や新たな気象衛星の整備など観測・予測能力の向上が不可欠です。

自然災害はいつ、どこでも自分の身に起こり得るものです。私が、東日本大震災や能登半島地震の被災地へ赴いた際には、被災者の方々から「まさか、ここでこんな災害が起こるなんて」という声を数多く聞きました。国民一人一人が、災害について、他人事ではなく自分事として考える必要があります。防災意識を向上させていくためにも、気象に関する知識の普及啓発の重要性はさらに増しています。

気象庁におかれては、自然と社会をつなぐ役割を担う官庁として、今後とも、その使命達成のため、なお一層活躍されることを期待します。衆議院でも、引き続き、防災・減災対策の強化に向け、関係委員会等において議論や調査を重ね、制度の整備・拡充に真摯に取り組んでまいります。

結びに、永年にわたる御功勞により、本日栄えある表彰を受けられる皆様方に対し、心からお慶びを申し上げますとともに、御参列の皆様方のますますの御健勝を祈念して、お祝いの言葉といたします。

令和七年六月二日
衆議院議長 額 賀 福 志 郎